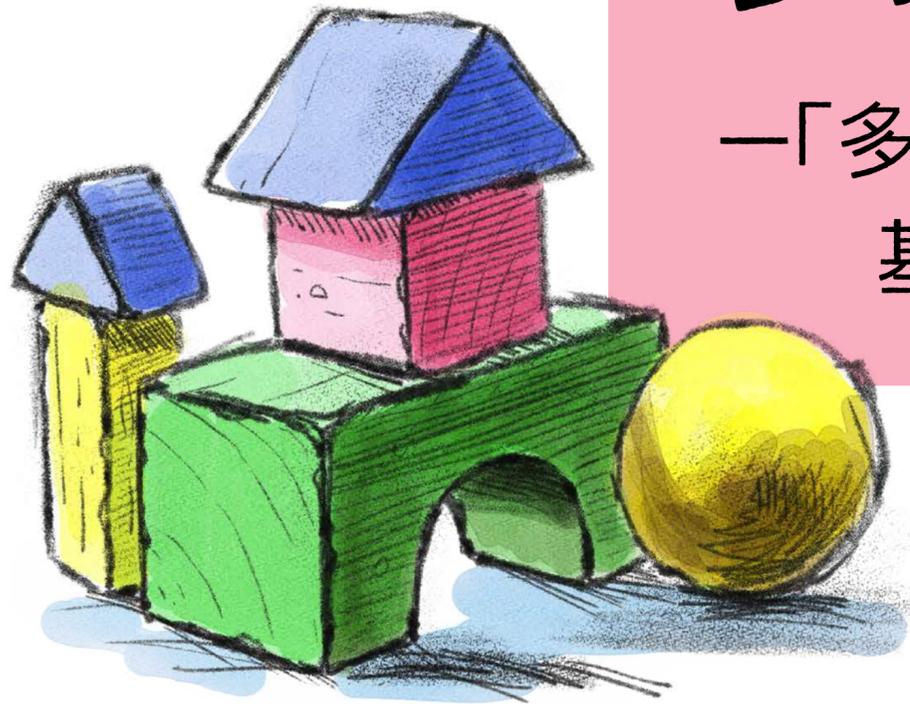




# 多文化共生の学級経営

—「多様性を受け止め、育ち合う学級づくり」の  
基礎知識を学び、実践の方法について考える—



# はじめに

## 【本講座の目的】

- ① 異文化の中で生活する子どもの困り感や周囲の子供との関わりを「捉える力」を高める
- ② 幼児の発達に即した多文化共生の心を「育む力」を確かなものにする

## 【キーワード】

多様性、思いが伝わる喜び、育ち合う関係性

## 【本講座の構成】

- 1 外国人幼児等が在籍する学級の幼児と保育者の現状
- 2 互いを受け止め合う学級集団の育ち
- 3 幼児が言葉を習得する過程と保育者の援助の在り方
- 4 多文化共生の学級経営

# 研修を進める時に大切なのは…

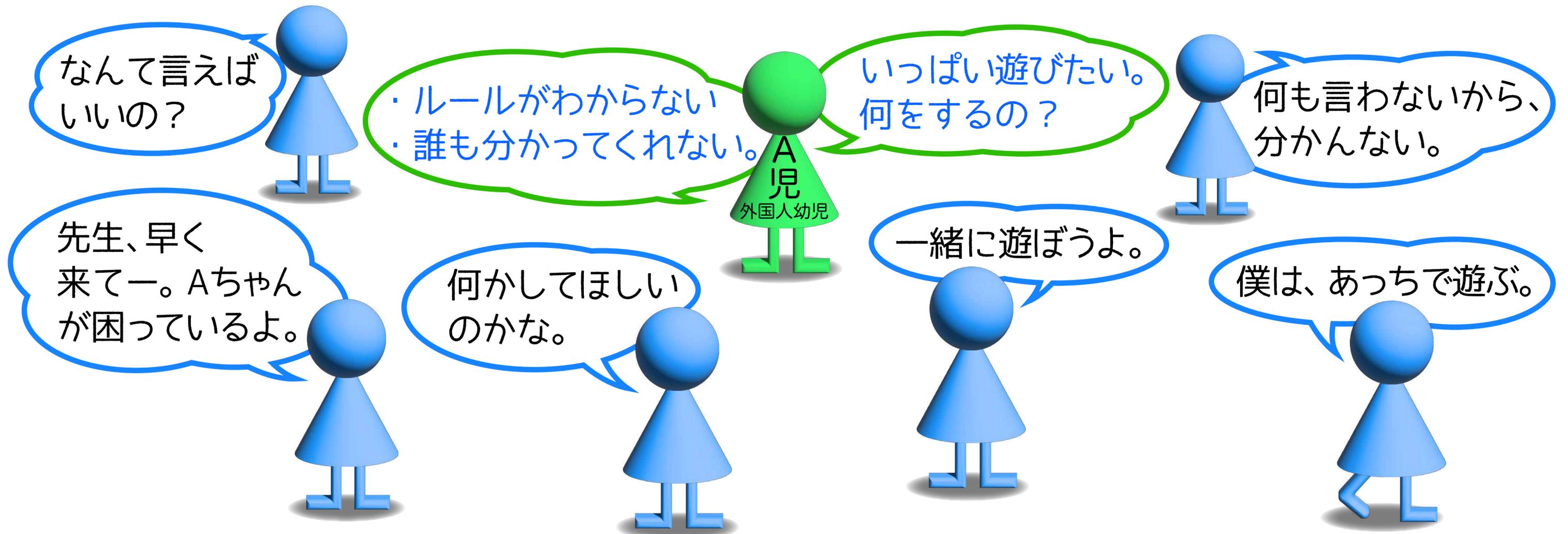
- ・ 多様な価値観があることに気付くこと
- ・ 「答え」は一つではなく、幼児の状況に応じて指導上の留意点は変わること
- ・ 外国人幼児等の日本での生活の予定も含めて見通し、柔軟に対応すること
- ・ 外国人幼児等の状況と学級の他の幼児との関わり等に着目すること

1

# 外国人幼児等が在籍する 学級の幼児と保育者の現状

# 1-1 外国人幼児等と学級の幼児たちの様々な思い

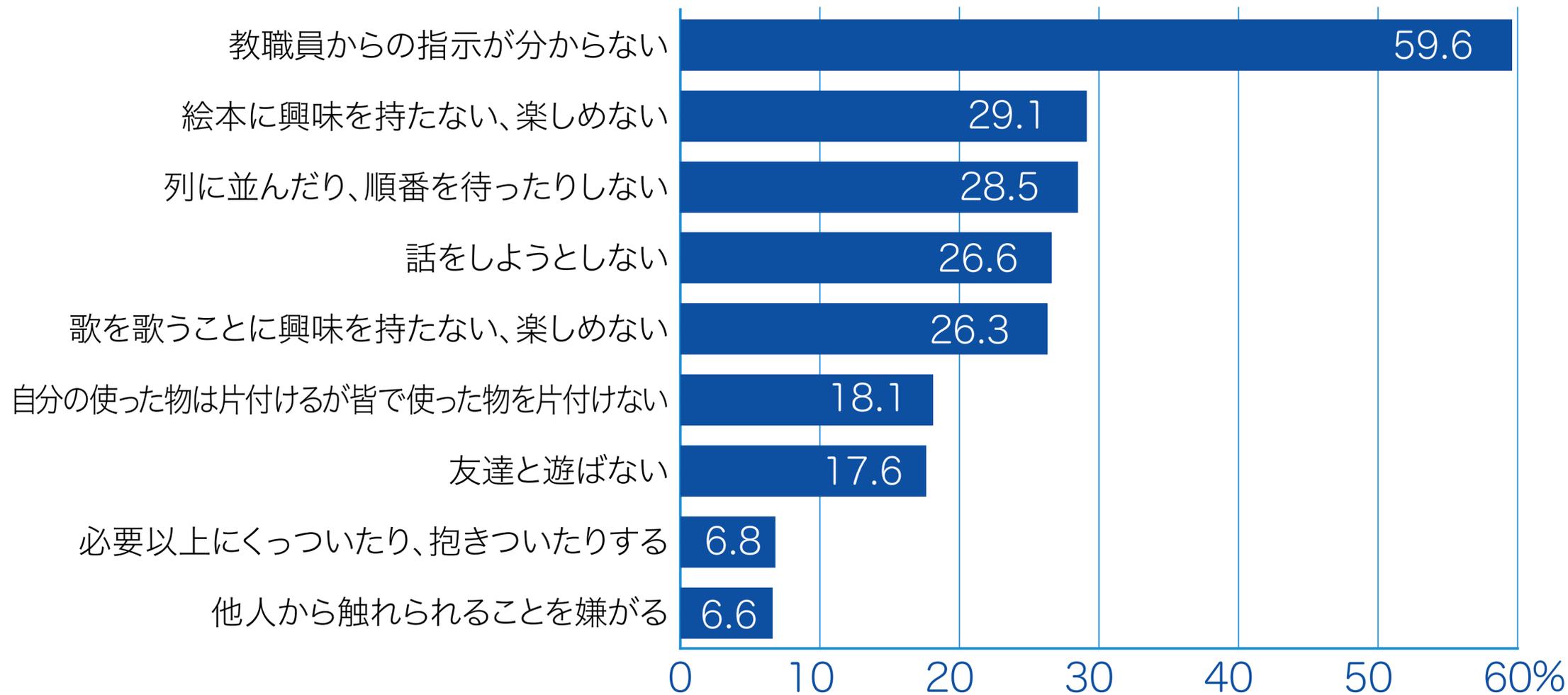
一人一人の思いは違い、思いを言葉にできず、どう関わればよいか戸惑っている幼児も多いのです。一人一人の思いを受け止めながら、思いが伝わる喜びを感じられるようにすることが大切です。



# 1-2 外国人幼児等の入園当初に保育者が気になる姿

(出典：平成 28 年度文部科学省委託「幼児期における国際理解の基盤を培う教育の在り方に関する調査研究」全国幼児教育研究協会)

## 入園当初の気になる姿「よく見られた」の割合 (%)



・外国人幼児等の入園当初の姿について、担任はどの程度「気になる」と捉えているかを調べたところ、左図のようになりました。  
こうした姿も、保育者の配慮によって、概ね半年くらい経つとこうした姿は解消することが多く、幼児たちは安心して生活するようになってきています。

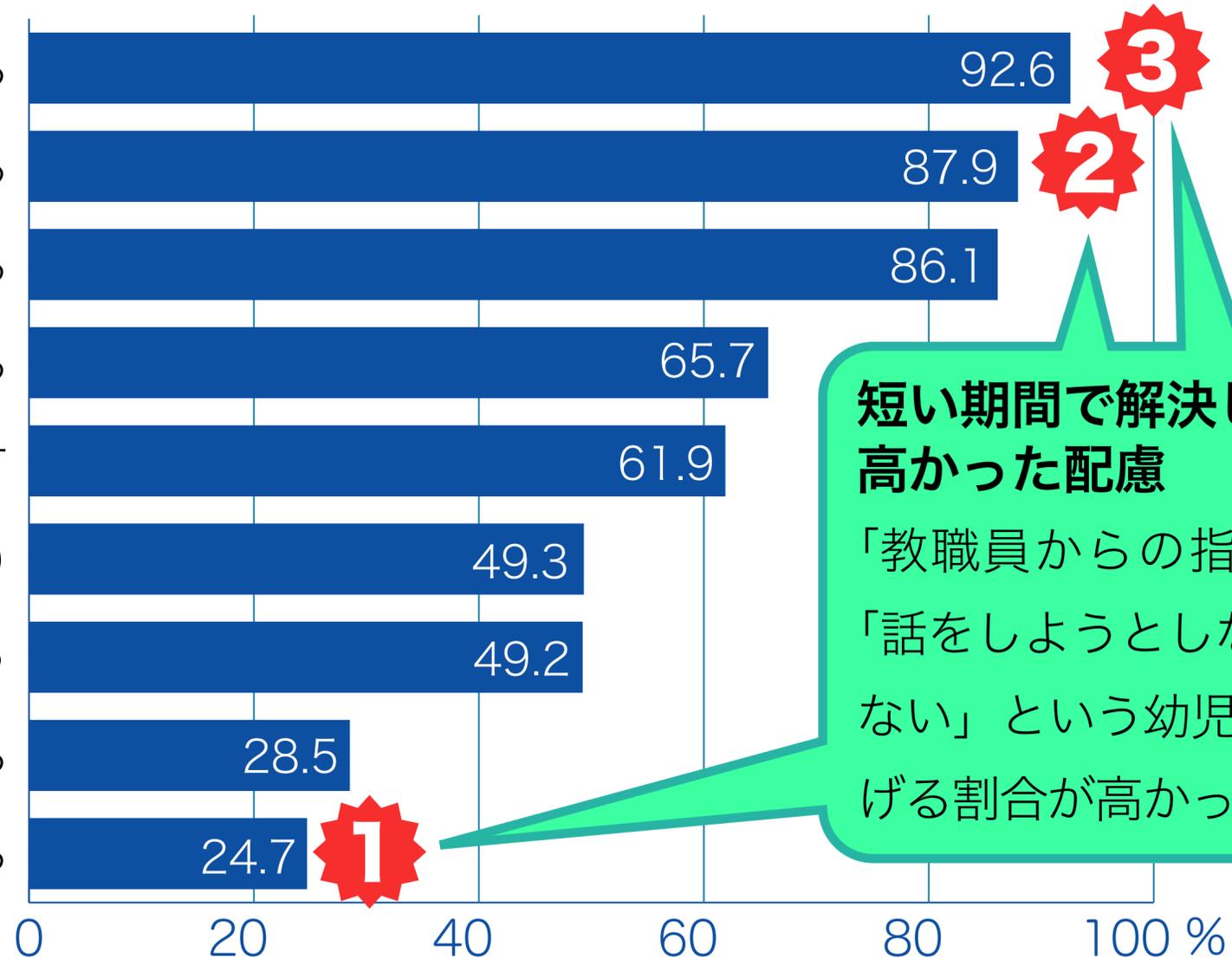
Q1 自園の外国人幼児等は、どのようなことに困っていますか？

# 1-3 保育者が学級経営上特に配慮したこと

保育者は、幼児の様子に応じて、様々な配慮をしています。それらの配慮によって、保育者が気になっている幼児の姿が解決していく期間は異なりました。

## 保育者が特に配慮したこと

- 日本語をゆっくりはっきり話すようにする
- 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働きかけをする
- 園全体で当該幼児に配慮する体制にする
- 話したりするとき、イラストなどでの表示を多くする
- 周囲の友達から外国人幼児等に声をかけるよう促す
- サポートする大人が近くにいる（通訳を含む）
- 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行う
- 様々な外国の文化理解や言語に関する研修をする
- 外国人幼児の国の文化や遊びを保育に取り入れる

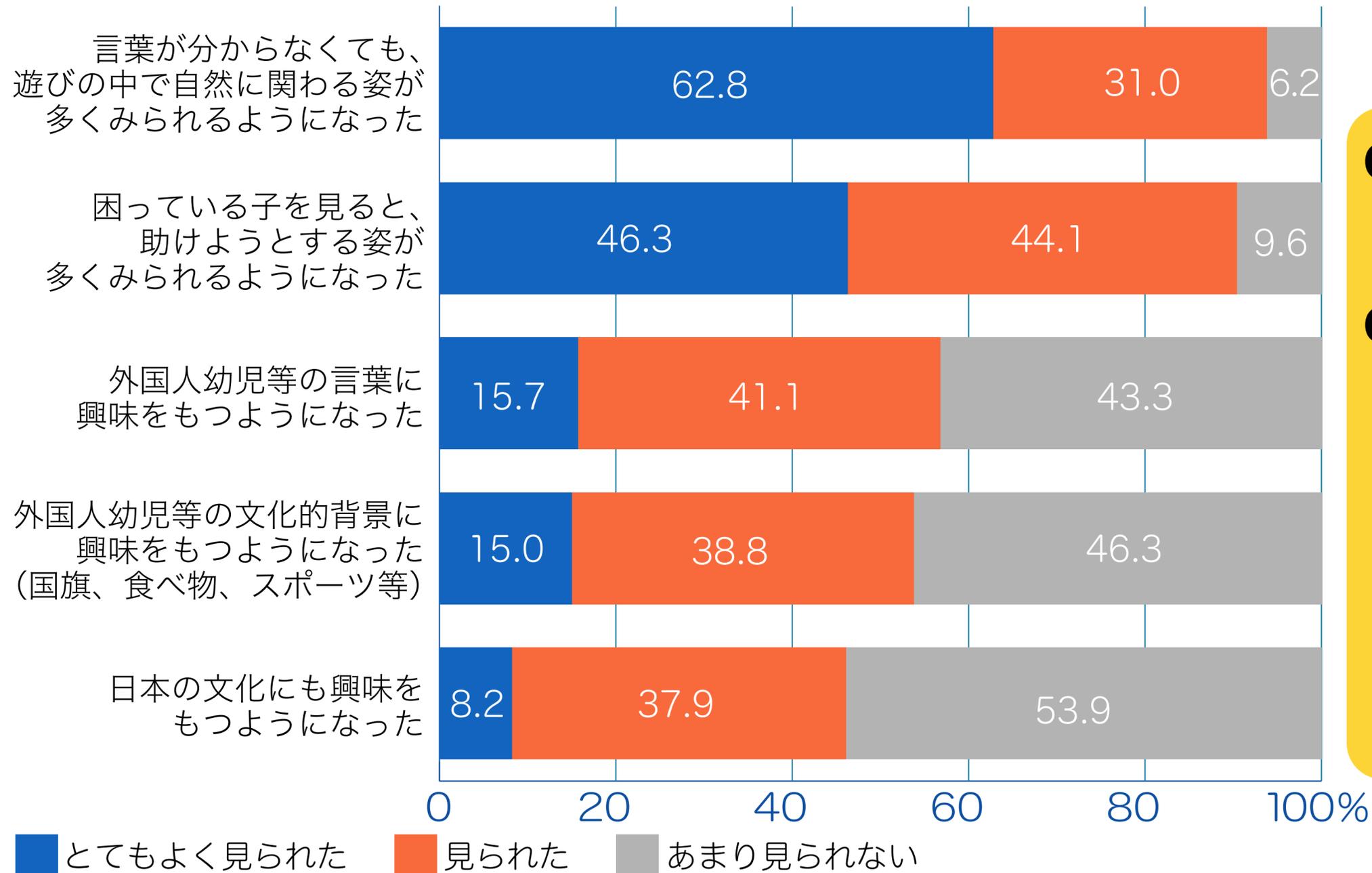


短い期間で解決した割合が高かった配慮

「教職員からの指示がわからない」「話をしようとしなない」「友達と遊ばない」という幼児に対して効果を上げる割合が高かった教師の配慮

# 1-4 共に生活する中で生まれる幼児同士の関わり・育ち

## 学級の幼児にこんな育ちが見られました



**Q2** 左の図の数値から、どのようなことに気付きましたか？

**Q3** 貴方の園では、どのような育ちの姿が見られますか？

- ・気付いたことを発表し、園内で共有しましょう。
- ・きっと、一人一人の幼児が自分の世界を広げ、育ち合っている姿に気付くと思います。

2

互いを受け止め合う  
学級集団の育ち

## 2-1 分かり合い助けようとする幼児たち

困っている友達を見つけると…

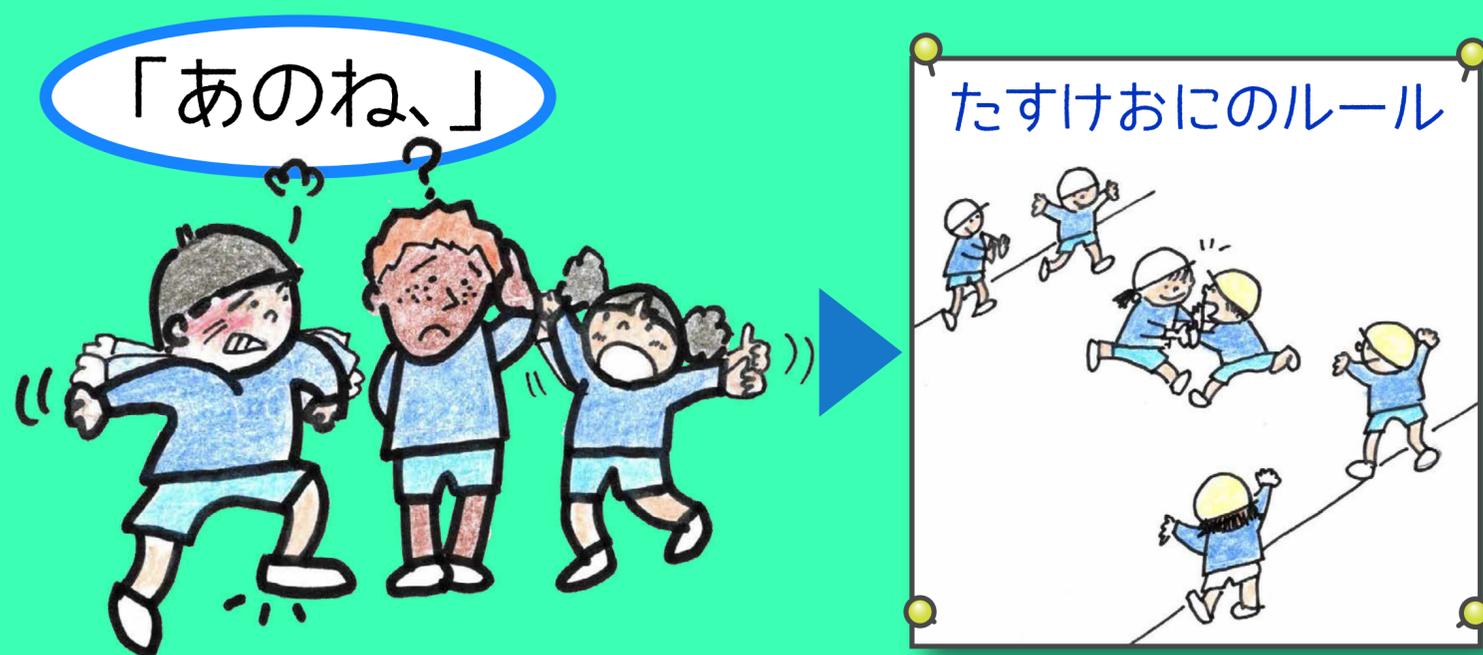
「せんせーい」



幼児は困っている友達を見つけると何とかしてあげたいと教師に助けを求めたり、自分で身振り手振りで伝えたりしようとします。

どうしても分かってもらいたいときには…

「あのね、」



- ・ 外国人幼児等がルールを破ると、分かってもらおうと自分で説明しようとする幼児
- ・ 遊びのルール等を示す図や掲示板等を活用して、説明する幼児 など

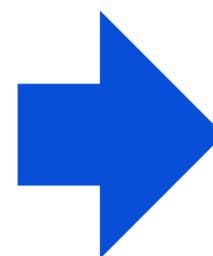
これが、「援助性」

## 2-2 「援助性」は多文化共生の基盤

### 協同性の育ちに関する枠組みの一つ

- ・「友達の気持ちを理解する」
- ・「友達を助けようとする」
- ・「友達を信頼する」
- ・「友達に感謝する」

など、相手に対する気持ちの傾向を示す。



多文化共生の  
学級経営

このような思いを日常の関わりの中で漠然と感じながら、助け合い、援助性が芽生え、主張したり受け止め合ったりしながら多文化共生の基盤となる感覚が身に付いていくのです。

- ・ 援助性に関する資料は、テキストP25～26に掲載してあります。これを参考に、自園の幼児の姿や学級の受け止め合い等の姿について協議をするのもお薦めです。

## 2-3 関わり合いの中で気付く多様性

- ・幼児は、様々な違いに気付き、興味・関心を広げて
- ・心を寄せる友達や共鳴する友達ができる
- ・多様な文化に触れて出会いを楽しみ
- ・自分の世界を広げている

### 多文化共生の 学級経営

- 違いに気付く
- 興味・関心をもって関わる



● 親しみをもって関わる

● 相手の思いや文化に気付く

● もっと知りたい・関わりたいと思って関わる

● 関わり合う楽しさ、  
伝わり合う喜びを感じる

外国人幼児だけでなく、一人一人の幼児の関わりを確かめてください。きっと、生活習慣や文化、言語等、多様な姿に出会ったときに受け止め合う姿が生まれています。

Q4 興味をもった事例について、テキストを参考に考えてみましょう



# 幼児が言葉を習得する過程と 保育者の援助の在り方

— 思いが伝わる喜びとコミュニケーション能力の育ち —

# 3-1 言葉の意味や使い方を習得する過程



思いが伝わる喜びが言葉に気付き、コミュニケーションの喜びにつながる → 言葉を育むための保育者の援助の重要性

## 3-2 幼児一人一人の育ちに応じた保育者の援助

- ① まずは、外国人幼児等が安心して学級の中で過ごせるように
- ② 何を感じているのか、どのように思っているのかに思いを馳せて
- ③ 表現しようとしていることを推測して、言葉にしてみる
- ④ 幼児の動きや反応から、その言葉が幼児の思いに沿っていたかを確認めながら関わっていく
- ⑤ 幼児の使っている言葉が違っていたら、「〇〇だったのね」など、言葉を交わす楽しさを大切にしながら修正していく
- ⑥ 無理に正しい言葉・表現を教えるのではなく、思いが伝わる喜びを中心に据えて対応していく
- ⑦ 言葉遊びなども保育の中に取り入れ、言葉への興味・関心を引き出していく

4

# 多文化共生の学級経営

# 4-1 外国人幼児を受け入れる準備(途中入園)の例

## 外国人幼児等の入園を楽しみに待ち、迎える学級づくり

### 新入園児(5歳児)を迎える掲示板の例



### 教師(T)と子供(C)との対話の例

T 「明日、ブラジルという国から新しいお友達が入園するよ」

C 「ブラジルって、どこ?」「知ってる。サッカーの国」等

T (世界地図や地球儀を見せながら)「みんなが住む日本はここで、新しく来るお友達は、ここ、ブラジルという国からくるの」

C 「なんて言う名前?」

T 「名前は、ヨクパメラさん。さくら組のこと知らないから、パメラさんが困っていたら優しく教えてあげられる?」

C 「うん。でも、ヨクパメラさんは日本語分かる?」

T 「あっ、分からない。どうしよう」

C 「優しく話す」「やって見せてあげる」

T 「そうね。ヨクパメラさんがさくら組のこと大好きになるように優しく助けてあげようね。ロッカーの名札は、カタカナとブラジルの文字で書いてあるから、ヨクパメラさんが分からなかったら教えてあげてね。」

## 4-2 自園の多文化共生に向かう状況を捉えてみよう

自園の幼児たちが興味をもって見たり聞いたりしている姿、互いを受け止め合っている姿、伝え合っている姿など、思い浮かべてみましょう。

- ① 学級の他の幼児たちは、どのように受止め対応していますか。
- ② 外国人幼児等は、日本語についてどのような場面で、どのような言葉を習得しているか考えてみましょう。
- ③ 幼児や学級集団の育ち、保育者や保護者の連携体制などを、担任、他の保育者、管理職等、それぞれの立場から捉えて、気付いたことを発表し合うとよいと思います。
- ④ 幼児一人一人の育ち、学級集団の育ち、園全体の自国文化・外国の文化の取り入れ方等、多文化共生の風土がどの程度生まれているか、みんなで考えてみましょう。

## 4-3 多文化共生の学級経営を目指して

**学級経営とは：**学級における教育活動だけでなく、幼児間の望ましい関係をつくり、一人一人が**自分の特性やよさを発揮して自己実現できるような集団**づくりをしていくこと。

- ① **学級経営の基本は、多様性を受け止める視点から**  
(幼児が、それぞれの**特性や良さ**を分かり合い、**生かし合える関係**づくり)
- ② **多文化共生のモデルは、教師の姿から**  
(外国人幼児等に対応している教師の姿から、学級の幼児は対応の仕方を学んでいます)
- ③ **多様性を受け止める風土づくりは、全園で共有してこそ実現する**  
(園全体での目標共有・協力体制 → 多文化共生の学級経営・園経営)
- ④ **外国の文化だけでなく、日本の文化の紹介も**  
(外国人幼児等の国・地域の遊びを保育に取り入れることは、外国人幼児が安心感を得る**有効な方法**です。外国の遊びや文化の紹介だけでなく、日本の遊びや文化の紹介を待つ幼児の気持ちにも気付いて！)

➡ **教育課程・指導計画、全体的な計画への位置付け**

# 研修の振り返り —課題が生まれる可能性—

- ・ 5歳児5月、リレーを始めると、周囲の幼児からケニア人のF児に「F君は絶対に早いはずだよ」「頑張ればすごく速いんだよ!」という声が聞こえた。しかし、実際に走ってみると、想像と異なった。
- ・ 担任は幼児の言葉に戸惑い、「頑張ってるよね」と本人に声を掛けた。みんなから「本気で走れば速いよ」と励まされたF児は、一生懸命練習をし、ぐんぐん速く走れるようになって運動会ではリレーのアンカーとして活躍した。
- ・ 周りの幼児は「やっぱり」「オリンピックに出てね」と言い、保護者からも「やっぱり、F君速いですよね」という感想が寄せられ、園側は複雑な思いが残った。

## 【ポイント】

- ・ 学級の幼児たちから期待をかけられ、励まされ勇気づけられたF児は、自分を信じて見事に育っている事例ということもできます。
- ・ オリンピックが近づいて様々な報道に触れ、幼児なりに陸上競技の特性・身体能力を感じ取っている姿とも言えます。
- ・ しかし、このほほえましい事例の中にも、多文化共生の視点から見ても、課題が生まれる可能性もあることを知っておく必要があります。

Q5 F児と周囲の幼児たちは、どのような思いをもっているか考えてみましょう。

Q6 なぜ、幼稚園は「複雑な思い」をもったのか考えてみましょう。